

令和6年台風10号における 浸水被害を踏まえた取り組み

令和7年度神奈川県大規模氾濫減災協議会

発表者：二宮町防災安全課

見えてきた課題

1. 人員の関係（ソフト）

- ①職員が手薄な時間帯だった
- ②電話対応で統制部が麻痺した
- ③防災行政無線の発報機会を逸した

2. 機器等の関係（ハード）

- ①防災行政無線等での緊急情報が覚知されなかった
- ②河川の状況がわかりにくい

1 - ①職員が手薄な時間帯だった

- 5人という人員を事前対応、夜間警戒、翌日対応に分けた
 - ⇒早朝という発災時刻は、もっとも手薄な時間になった
 - ⇒急激な増水による溢水により、職員の参集が遅延した

課題：防災職員だけではない統制部の人員体制

1 -②電話対応で統制部が麻痺した

- 発災前から電話での問い合わせが殺到し、人員が割かれた
⇒ 情報集約、状況判断、対応指示といった本来の統制部の動きができなくなった
⇒ 常駐する消防署に対応依頼が集中した

課題：初動指針に定める役割分担が明確でない部分がある

1 -③防災行政無線の発報機会を逸した

- 少ない人員、電話対応で麻痺した統制部により、発災前に発報するべき「避難指示」等の発令、その発報機会を逸した
- 無線での発報の消防署に依頼したが、テンプレート等がなかったため、調整に時間を要し、急速に変化する状況に追いつけなかった

⇒避難指示発令前に河川が溢水し、緊急安全確保に切り替えた

課題：判断に対する防災行政無線発報の迅速化

2-①緊急情報が覚知されなかった

- 防災行政無線の音は、雨の音などにより聞こえず、同時に配信するメールも「朝の忙しい時間」などには見てもらえない。
⇒事後に聞き取りを行った際、多くの人が「放送を知らなかった」、「テレビで初めて知った」という人が多かった。

課題：緊急情報を確実に対象者に覚知してもらう方法

2-②河川の状況がわかりにくい

- 夜間及び大雨時は川の状況がわかりにくい



1-①職員が手薄な時間帯だった 改善：初動期災害対応支援チーム創設

- 「防災担当課経験者」などから構成された「初動期災害対応支援チーム」を創設し、警戒期から統制部として機能できる人材を確保した。

⇒避難所開設、夜間警戒、発災直後の人員を確保するとともに、経験者として主体的に活動できる。

※本年の7月津波警報、8月大雨警報でも活躍

※発災後の「被災者支援チーム」も同時に創設

1-②電話対応で統制部が麻痺した 改善：役割分担を明確化

- 職員初動指針で不明瞭な役割分担や明記されていない役割について、役割分担を明確化した
- 受電⇒受付⇒情報集約までの流れや書式を制定した。
⇒受付様式は制定されていたが、職員間で一般化されていなかったため、今年度の職員研修等で電話の受け方や受付票の書き方を研修した。

※まだ、受電から集約までの流れは、役場構造物の課題があるため、今後の新庁舎移転を見据えて改善していく。

1 -③防災行政無線の発報期間を逸した 改善：発報情報のテンプレート化

- 避難指示や河川溢水、津波警報など、緊急で発報する可能性がある放送内容をテンプレート化した。
 - ⇒ 防災職員だけでなく消防署員も、災害対策本部の指示で短時間に発報できる体制とした。

2-①緊急情報が覚知されなかった 改善：エリアメールを併用して周知

- 川の溢水や津波警報などの緊急情報は、町域内の携帯電話・スマートフォンに直接配信するエリアメール併用を基本とした。

※この取り組みは令和6年11月2日の大雨時から実施し、非常に効果があることが確認できた。

※従前から実施している消防署や町広報車による巡回広報は継続して実施

参考：発災直前の消防車両による巡回広報



参考：発災直後の消防車両による通行止め



2-②河川の状況がわかりにくい 改善：河川に量水標を設置（県事業）



参考：内輪橋の量水標



参考：内輪橋の量水標（現在）



その他：車の避難場所の設置

- 発災後、「車の避難場所」を求める声があり、今年8月から町営第1駐車場を「大雨時の車避難場所」として設置

